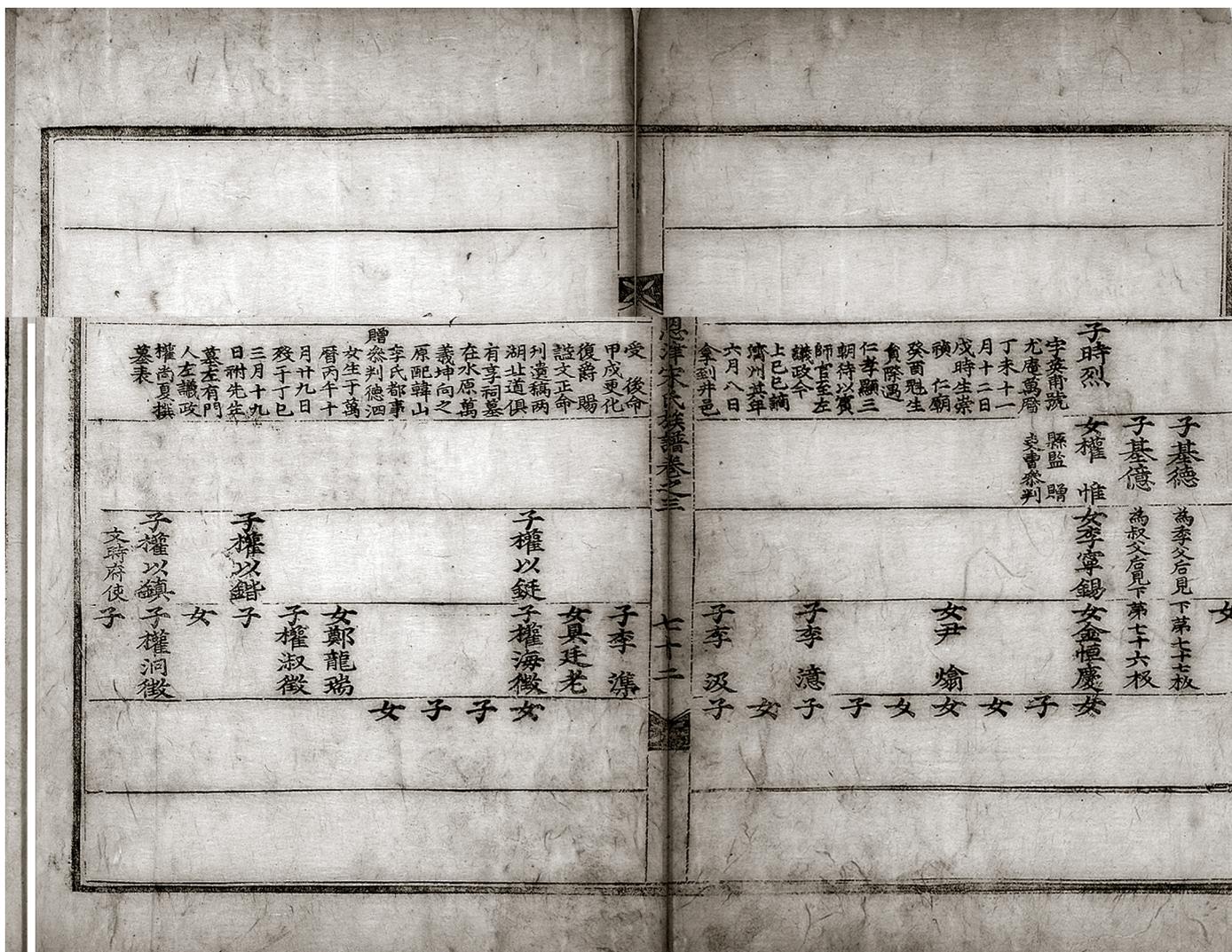


明日の 東洋学

Research and Information Center for Asian Studies (RICAS)
Institute of Oriental Culture, University of Tokyo

東洋文化研究所所蔵の
朝鮮半島族譜資料について
宮嶋博史

新たな研究交流の試み
平勢隆郎



本研究所に所蔵されている『恩津宋氏族譜』巻3の一部である。朝鮮時代の著名な朱子学者であり、17世紀に熾烈を極めた党争の中心人物でもあった宋時烈（1607 - 89）の名が見える。この族譜は正確な刊行年は不明であるが、1720年以前に作成されたものである。通常「4巻譜」と呼ばれており、本研究所には巻2 - 4が所蔵されている。初期族譜の体裁を留めており、外孫たちもすべて収録されているだけでなく、男女の区別なく、娘の場合はその配偶者である婿の名で、出生順に記載されている。

東洋文化研究所所蔵の朝鮮半島族譜資料について

宮嶋博史

1. はじめに

族譜とは、中国を中心とした東アジア社会で編纂されてきた家系記録の一種である。族譜の編纂が広く行われていた地域は、台湾・香港を含む中国だけでなく、朝鮮半島、ベトナム（主に北部）、琉球に及んでおり、現在でも韓国などでは盛んに編纂されている。本研究には以前から大量の中国族譜が所蔵されていたが、近年、朝鮮半島の族譜の系統的収集に努めてきた。ここでは、本研究所蔵の朝鮮半島族譜について概要を紹介するとともに、朝鮮半島族譜の性格について私見を述べることにしたい。

2. 所蔵族譜の概要

現在、本研究所に所蔵されている朝鮮半島族譜の総数は、552点、冊数にして3,000冊近くに上る。そのほとんどは木版、石版、鉛版などの刊本であるが、少数の鈔本と影印本が含まれている。時代的には15世紀のものから近年のものにまで及んでおり、世紀別に見ると、15世紀1点、16世紀1点、17世紀2点、18世紀12点、19世紀45点、20世紀の1945年以前127点、1946年以後357点で、編纂年代不明のものが7点となっている。ただし15世紀か17世紀までの4点は族譜の原本ではなく、後に影印されたものであり、原本でもっとも古いものは1709年刊の『昌寧成氏族譜』である。

朝鮮半島において族譜が編纂・刊行されるようになるのは15世紀にはいつてからのことで、1403年に編纂された水原白氏の族譜がその嚆矢とされている。しかしこの族譜は序文が伝わっているだけで現存しておらず、現存するもっとも古い族譜は成化12年（1476年）に刊行された『安東権氏世譜』である。

族譜は親族・家族制度や、婚姻関係をはじめとして、研究上貴重な情報がたくさん含まれているが、広く世上に流布する性格のものではなかったため、研究機関や公的図書館にもあまり所蔵されていない。族譜編纂の主体は同姓同本集団と呼ばれる父系血縁集団である。たとえばもっとも古い族譜を有している安東権氏という集団の場合、安東という地名がこの集団の祖先の出身地＝本貫であり、権

がその姓である。すなわち、姓と本貫を同じくする父系血縁集団が同姓同本集団であり、この集団の組織（宗親会、宗中、門中など、さまざまな名称が付けられている）が自分たちの族譜を大切に保存しているのが一般的である。

研究機関等で朝鮮半島の族譜を比較的多く所蔵しているのは、韓国国立中央図書館、ソウル大学校奎章閣、韓国精神文化研究院蔵書閣、ハーバード大学燕京図書館などである。このうち、韓国国立中央図書館には20世紀前半の植民地期に刊行された族譜が大量に所蔵されており、奎章閣と燕京図書館には古い時期の貴重な族譜が多く所蔵されている。日本国内にはほとんど所蔵されていないが、東北大学の嶋陸奥彦教授が燕京図書館所蔵族譜の複写本を中心に、貴重な族譜を収集されている。こうした状況に鑑みて、本研究ではこの数年間族譜の系統的収集に努めてきたわけである。なお、本研究所蔵族譜については、その目録をまもなくウェブ上で公開することになっている。

3. 朝鮮半島族譜について

族譜の編纂が始まるのは宋代中国においてである。歐陽修や蘇洵の作った族譜がその原型となったとされているが、族譜の編纂が盛んになるのは明代に入ってからである。中国の族譜は、ある一人の人物を起点として、その父系の子孫たちを記録したものである。中国では父系血縁集団を宗族と呼ぶが、族譜はこの宗族集団の名簿であり、「宗譜」という書名のものもっとも一般的である。

中国における族譜編纂の影響を受けて朝鮮半島でも族譜が編纂されるようになったわけであるが、族譜は私的に編纂されたものであったので、中国でも朝鮮半島でも、その編纂の全体像を知ることがきわめて困難である。朝鮮半島の族譜について言えば、これまでに編纂された族譜の総数は膨大なものになると思われ、今日においても韓国では毎年大量の族譜が刊行されている。朝鮮半島の族譜編纂に関するもっとも包括的な調査は、韓国の新聞社である中央日報社が行った調査であると思われるが、その調査結果をまとめた『姓氏の故郷』（1989年刊）によると、これまでに455の同姓同本集団が少なくとも1回以上、

族譜を編纂したことが報告されている。現在韓国には3,000余りの同姓同本集団が存在している。その中で455集団が族譜を編纂しているわけだから、少数のように見えるが、人口数でいうとこの455集団が占める比重は圧倒的である。

まず同姓同本集団ごとに、いつから族譜を編纂するようになったのかを見ると、15世紀20、16世紀33、17世紀81、18世紀152、19世紀48、20世紀60、不明61となっている。族譜編纂が15世紀に始まり、17、18世紀に多くの同姓同本集団が自分たち一族の族譜を有するようになったことがわかる。

次に時期別の編纂族譜数を見ると、15世紀23、16世紀43、17世紀148、18世紀398、19世紀580、20世紀の1945年以前417、1946年以後684、不明303、という結果が得られる。この調査の対象となったのは、一つの同姓同本集団全体を収録した「大同譜」と呼ばれる族譜であり、族譜にはこれ以外に、同姓同本集団の一部を収録した「派譜」と呼ばれるものがある。「派譜」は「大同譜」の数倍ないし数十倍もの数が編纂されたものと思われるが、その全容を知る術はない。しかし「大同譜」の編纂数を見ても、新しい時期になるほど族譜の編纂が盛んになってきたことがよくわかる。最初に述べたように、族譜は中国およびその周辺地域で作成されてきたものであるが、現在ではおそらく韓国においてその編纂がもっとも盛んであると言ってよいだろう。

朝鮮半島の族譜についてもう一つ指摘しておきたいことは、外ならぬ族譜という呼称についてである。族譜という呼称は東アジア世界で共通して使用されているものであるが、実際に編纂された族譜にはさまざまな名称が付けられている。中国では「宗譜」という名称がもっとも多く使用されているのに対して、ベトナム・琉球では「家譜」という名称が一般的である。この違いは、単なる名称の違いではなく、収録範囲の規模を反映したものであるかということが、未成道男氏によって指摘されている（未成「ベトナムの『家譜』」、『東洋文化研究所紀要』127所収、1995年）。つまり、中国の「宗譜」に比べて、ベトナムや琉球の「家譜」はその収録範囲が狭く、それが名称に反映されているのではな

るが、これら異姓の人物たちが相互を親族と観念していたとは到底思えないのである。まして彼らを包括する何らかの親族組織が存在したとはまったく考えられない。中国の族譜が宗族という血縁組織なしには編纂されなかったのは異なり、成化譜に収録されている人物は親族組織を前提としないものであったと見るのが自然であろう。

次にもう一つの問題としては、18世紀以後の族譜から父系血縁結合の強化という傾向を導き出し、中国の族譜と基本的に共通する性格のもとと解釈する点についてである。しかしこれまでの研究でも指摘されているように、18世紀以後の族譜においても、婚姻関係の記載方式で朝鮮半島の族譜は中国と大きく異なっていた。図2を見るとわかるように、ここでもやはり初期族譜と同様に、異姓の人物たちがより多く登場するのである。すなわち同姓同本集団の男子構成員だけでなく、その配偶者の父親および女婿の姓名が必ず記載されるのであるから、族譜の編纂主体である同姓同本集団のメンバーよりも、固有名詞としては異姓の人物の方が数的に多く収録されることになるわけである。こうした婚姻関係に関する族譜の記載は中国のものとは大きく異なっており、中国では女婿はほとんど登場しないし、妻父名が記載されるものも少数に属する。つまり中国の族譜は宗族メンバーの名簿という性格をひじょうに純粋に保っているのに対して、朝鮮族譜はむしろ婚姻を通じる異姓の集団との結びつきを重視する編纂方法を採用しているのである。

以上述べたことからすると、初期族譜から18世紀以降族譜への編纂方式の変化を、双系的親族結合から父系的親族結合への変化を反映したものとする従来の理解には従い得ないことになる。従来の通説的理解の前提には、族譜というものは何らかの親族結合に基づいて作成されるものであるという理解があった。そしてそうした理解は、中国の族譜が宗族という親族組織によって作成されたことから、同様の前提を他地域の族譜にも当てはめようとしたことに起因すると思われるのである。

朝鮮半島の族譜が何らかの親族結合、親族組織に基づき、その構成員を示すことを目的とするものではなかったとすれば、それでは

一体何のために族譜が編纂されたのであろうか。姓を異にする名族たちの横の繋がりを誇示することが族譜作成の第一の目的であった、というのが筆者の考えである。

安東権氏・成化譜を最終的に完成させた徐居正は、その序文で、「現在の中央政界で官職に就いている数千の人は皆、安東権氏の二つの支派の子孫である」という趣旨のことを述べている。つまり成化譜は安東権氏の族譜でありながらも、当時の政界中枢部の名族たちがどこかで婚姻関係を通じて結びついていること、そしてその結びつきの中心には安東権氏が存在していることを示すために編纂されたと理解できるのである。双系であれ父系であれ、親族結合・親族組織という概念では到底収まりきれない広い範囲の人物たちが収録されているのも、こうした族譜編纂の目的ゆえであった。

初期族譜をこのように理解するとすれば、18世紀以降の族譜はどのように理解できるであろうか。筆者は、18世紀以降の族譜もその基本的性格は初期族譜と同一であったと考える。中国の族譜と違って婚姻関係が重視されていることが、名族としての性格を端的に示していると思うからである。それでは初期族譜から18世紀以降の族譜への変化はどう解釈できるだろうか。

17世紀以降の族譜になると次第に外孫の収録範囲が狭まってくることは前述したが、こうした変化が生じた原因は二つあったと考えられる。一つは、初期族譜のように外孫の系統もすべて収録するとなると、族譜自体が膨大なものにならざるをえないことである。15世紀に編纂された成化譜においても、その収録人員は8千名を超えており、すでに膨大な数の人たちが収録されていた。17、18世紀に族譜を編纂する場合にはこれを遙かに上回る人員が収録対象となるわけで、多くの族譜は、外孫の収録範囲を限定する理由としてこの点を指摘している。

もう一つの原因と考えられるのは、多くの同姓同本集団が族譜を編纂するようになったことである。すなわち、初期族譜が編纂された15、16世紀において族譜を有する集団がごく少数であったのに対して、17、18世紀になると多くの集団が自らの族譜を持つようになった。したがってあえて族譜に外孫を

延々と収録しなくても、女婿たちが属する一族の族譜を見れば、外孫の系譜を辿ることが可能になったわけである。これが外孫収録範囲の縮小を生み出した、もう一つの原因であったと思われるのである。

以上述べたように、朝鮮半島の族譜が基本的に名族譜としての性格を有するものであるという理解に立つ時、以下のような諸現象があらためて注目される。

第一に、『文譜』とか『武譜』、『蔭譜』といった名称をもった書物の存在である。こうした名称をもつものは本研究所にもいくつか所蔵されている。その内容は、ある時点における文官や武官、あるいは蔭官（恩蔭によって官位に就いた者）たちの名簿であるが、それぞれの人物について、八代上までの父系祖先の名、および外祖（母方の祖父）・丈人（妻の父）の姓名を書いているのが一般的な形式である。これらは官僚たちが横の繋がりを確認するとともに、それぞれの由緒を誇示したものであり、典型的な名族譜であると言えるが、族譜的な名称と体裁をとっていることが注目される。これらのものとは性格がやや異なるが、『北譜』（本研究所所蔵）や『南譜』といった党争に関わる党派別の名簿も、やはり族譜のような体裁をもっている。

近代に入ると、『河東郷家世系源流』や『順天名族譜』（いずれも本研究所所蔵）のように、地域ごとに名族たちの族譜を一冊にまとめた書物が編纂されるようになる。こうした現象は名族たちの威信が失われていくことに対する危機意識の産物であるといえようが、やはり族譜の名族譜としての性格が前提になっていると見ることができる。日本植民地支配期に編纂された有名な『万姓大同譜』は、名門の族譜を集大成したものであるが、この書物こそ、朝鮮半島族譜の性格を端的に示すものと言えるのである。

第二に注目される現象は、18世紀以降においても「外孫譜」とか「内外子孫譜」というような名称をもつ族譜が編纂されていることである。本研究所に所蔵されている族譜の中に『昭剛公内外子孫譜』（影印本）というものがある。これは1831年に刊行された族譜で、全州李氏・李 彰という人物の内外子孫を網羅したものである。こうした種類の族譜は韓国国立中央図書館にもいくつか所蔵さ

れており、また刊行年代は不明であるが『耽津崔氏外孫譜』という族譜のように、外孫だけを収録した特異な族譜も編纂されている。朝鮮時代後期においてもこうした族譜が編纂されていたのであり、親族観念や親族組織のあり方からは説明できないものである。

朝鮮半島で編纂された族譜に「宗譜」という名称が殆ど使われていないことも、上述べたような名族譜としての性格に起因するものであるかも知れない。同姓同本集団を表す言葉としては同宗、宗中という言葉が中国と同様に使われながらも、「宗譜」という名称が

避けられていることは、中国との違いが意識されていたと考えるのが自然ではないだろうか。また朝鮮半島の族譜を名族譜として把握できるとすれば、ベトナム、とりわけ琉球の「家譜」との親近性があらためて注目されることである。(東洋学研究情報センター教授)

新たな研究交流の試み

平勢隆郎

この1月15日、京都大学人文科学研究所、および国立民族学博物館から、それぞれ4人の方を我が研究所にお招きし、交流会を開いた。

かつて、戦前からのご縁もあり、人文科学研究所との間に交流会が開かれていたのであるが、このところそれは中断されたままであった。戦前からのご縁というのは、我が研究所が戦後になって別の研究所を吸収したことによる。

戦前、外務省下に東方文化学院が設立され、京都・東京にそれぞれ研究所が置かれた。このうち東京の研究所をわが東洋文化研究所が、また京都の研究所を京都大学人文科学研究所が、それぞれ吸収した。東京の研究所の蔵書などはわが研究所に移管され、研究員も5名の方がわが研究所に移られた。わが研究所は法・文・経・農の四学部から専任教官が任命され三部門(哲学・文学・史学部門、法律・政治部門、経済・商業部門)を構成していた。これにそれぞれの学部から兼任教官が任命されて加わっていた。当時の簡単な記録などを見てみると、戦後、兼任教官枠を専任教官枠にきりかえ、東方文化学院の5名の研究員の方に移っていただいたということのようである。三部門(実質六部門)の体制は、東方文化学院の吸収をもって、六部門に再編され、再出発することになった。

その後、我が研究所は、人文地理学部門、文化人類学部門、南アジア部門、東北アジア部門、東南アジア経済・社会部門、西アジア政治・経済部門の七部門を設置し、合計十三部門となった。それを1981年に統合再編し、大部門制に移行した。凡アジア部門、東アジア部門(第一部門・第二部門)・南アジア部

門・西アジア部門の四大部門(五大部門)である。

すでに述べたように、戦後しばらく続いた人文科学研究所との交流会は、東方文化学院のそれを継承するものであった。その後、交流の輪を広げようとする試みがなされたが、交流会という形ではなされないまま今日にたった。

そこで、本年、広く交流の場をもつという方針のもと、戦前以来のご縁がある人文科学研究所と、研究上の関係が密接な国立民族学博物館から、それぞれ人をお呼びして交流会を開いた次第である。

今後、機会をとらえて交流会を続けるということもあり、本年は総花的な研究発表ではなく、東アジアとその周縁を対象をしぼって討論しようということになった。

最初に研究発表されたのは、人文科学研究所の岡村秀典氏である。演題は「動物考古学からみた中国と周縁 礼の世界からみた中国と周縁」であった。

新石器時代以来の出土遺物には、動物骨が含まれている。これには、人々が動物を殺してその肉を食べた残滓と意図的に動物を埋葬したものとがある。前者は食生活を知る手がかりとなり、後者は儀礼的な動物埋葬としての可能性を論じることができる。

岡村氏の発表は、この出土動物骨を使っての検討である。殷代における畜産の変革問題から話が始まり、春秋・戦国時代における「華夏」と「夷狄」の動物供儀の問題も検討された。

前3千年紀の龍山時代、農耕社会においてブタの飼養がひろがった。オールドスから黄河上流域にいたる黄土高原地帯では、ヒツジが

しだいに増加しているが、依然、副業としてブタを飼養する雑穀農耕がおこなわれている。

前2千年紀の殷代になると、変化がおとずれる。河北の雑穀農耕地帯では、依然としてブタ優位であるが、その一方で牛を主に消費する王都が出現した。供儀におけるウシ・ヒツジ・ブタの序列が成立し、ウマ・ウシ・ヒツジの組織的な牧畜がはじまる。これは礼制の形成として論じることができる。

華南の稲作農耕地帯ではブタの畜産を縮小し、「稲を飯にし、魚を羹にする(『史記』貨殖列伝)」生活様式が成立する。

黄土高原地帯では、農耕とブタの畜産をしだいに放棄し、ウシ科(ウシ・ヒツジ・ヤギ)やウマ科など群居性の有蹄類を放牧する牧畜が成立した。

前2千年紀に後の礼制として論じられる制度につながる供儀の動物の序列などが成立し、後の「華夏」・「夷狄」の差異を論じる上で着目すべき地域ごとの特色が見られる。

「華夏」と「夷狄」は漢代において漢族とその他の習俗を比較してのべる場合の重要な用語である。その言葉の用例を溯るのではなく、いわゆる漢族とその他との別を述べる場合の具体的習俗について、検討している。

「華夏」では、青銅礼器を用いた肉食儀礼、すなわち用鼎制度と用牲制度が認められる。複数の同形の鼎をいくつ並べるか、牲肉をどのように規定するかのおおよその規範が春秋時代に確立する。身分秩序を反映しているようである。これは、中国文明を特徴づける礼制がこの時期に確立してくることを意味している。

具体的事例として、山西省太原市金勝村の

趙卿の墓（春秋後期）、河南省浙川県下寺の楚の墓（春秋後期）が示された。後者は、楚国の貴族が周の礼制を受容し、ウシ・ヒツジ・ブタの畜産と消費を行っていたことを示すものである。

いわゆる「夷狄」の地については、ヒツジを主とする獣頭骨の副葬習俗が認められる。殷・西周王朝の北辺地帯に出現したこの習俗は、春秋時代に「華夏」では消失するが、燕山南麓ではイヌを主にウマ・ウシ・ヒツジを加えた獣頭骨の副葬として再び現れたものである。戦国時代になると、内蒙古から寧夏・甘肅にいたる長城地帯にヒツジを主としてウマ・ウシを用いる牧畜民の儀礼として確立する。これは「華夏」の礼制とは排他的な関係にあり、のちの匈奴帝国につながる独自の文化である。

コメント役として人文科学研究所の岩井茂樹氏と池田巧氏、国立民族学博物館の田村克己氏と横山廣子氏をお願いし、個々にどの発表についてコメントするかを決めずに、思うところや質問を述べていただいた。これに我が研究所のスタッフが加わり討論するという形にした。

犠牲の交替を論じる場合、どのように材料を選んだかや、地域を論じる場合の地域設定をどうしたか、ニワトリはどうして議論からはずしたか、ウシの種類は特定できるか、といった質問が出され、これらの質問から質疑応答が続いた。

筆者は司会をしていたが、自分の研究では漢字を使う場の拡大を論じている。恩師の説をひきながら漢字は殷代では王都などごく限られた場でしか用いられておらず、西周も青銅器は分与されたが各国が独自に漢字を用いる環境は整っていなかったこと、春秋時代になると青銅器に銘文を鑄込む技術が流出して漢字が各国で定着し、これを長江流域の大国が併呑していき、漢字世界はひろがったことを主張している。その目からすると、岡村氏の礼制に関する検討結果は、この漢字世界の拡大に関連づけて解釈できる部分が極めて多く、とても興味をそそられる。いわゆる中国の礼制は、殷に起源をもち、春秋時代における漢字世界の拡大をもって体系づけられるようである。岡村氏は慎重に言葉を選ばれているが、このことは、春秋時代に関する従来の

認識を根底から覆す可能性を秘める。

次に発表されたのは、人文科学研究所の富谷至氏である。演題は「中国と周縁 二〇世紀、出土文字資料の発見に関して、周縁がもたらした中国理解の誤謬」であった。

敦煌と居延から一九〇〇年代に木簡が発見されて以来、紙ができるまでの書写材料について、木簡または竹簡が使われていた、と説明されるわけだが、その説明にひそむ誤解が研究者の間の常識になっている。富谷氏は、このところ自身がスウェーデンと日本との西域出土文字資料に関する共同調査を主催してこられた。その地道な研究を通して得られた知見を提供された。

中国では、木簡と竹簡が出土する。やがて紙が出現する。その後、日本に紙と木簡がもたらされたが、なぜか竹簡は出土してこない。このことについて、富谷氏は、紙と木簡には使用方法と機能の相違があり、その相違は、紙のない時代までさかのぼると説明された。おそらく後世の紙に相当する用いられ方をしていたのが竹簡であろうという。竹簡を用いるべきところ、竹が得られない地域では、代用品が用いられる。だから、西域では、竹簡が出土してこない。その西域の出土品を通して、われわれは書写材料の歴史を再構成してきた。だから、中国の中央における書写材料の別に、格別注意をむけることがなかった。

いわゆる竹簡・木簡は、簡牘と総称される。この簡牘には、細長い簡と幅広の牘がある。牘は木でしか作れないが、簡の方は竹簡でも木簡でもよい。簡としての木簡は、竹簡の代用品で、その使用方法と機能を受け継ぐのが紙であろうという。

封検というものがある。現在の封書の封筒の役割を果たす。フタをはめこみ式に文書の板と合わせ、ひもでしばって粘土をおしつけ封印する形式がよく知られている。カロシティー文書がこの形式での封検を残しており、それが当時の一般的あり方だと考えてきた。しかし、封書に相当するものを中央に求めると、それは竹簡を用いたものになる。伝存の文献にも、竹簡の作り方や、おそらく文書の板ならぬ竹簡を帛囊に入れて検（の札）をつけられた文書の記載などが見える。カロシティー文書は、一つの地方的あり方を示すものであったのに、簡牘一般のこととされ語られ

てきている。

これに関わるのが紙であり、後漢の時代に蔡倫が紙を作ったことが知られている。しかし、前漢の遺跡から紙が出土して、この話は虚構だとされてしまった。ところが、前漢の紙は、書くには適しておらず用途は包装である。一部発見された文字を記した断片も、この包装がなされた後に表面に書かれたことがわかる。おそらく、蔡倫の発明により、文字を書くという紙の用途が始まったのであろうという。

時間が少なかったので詳しくは語られなかったが、スタインによる発見、蕭による追認で、定説化しているものに「玉門関」遺跡がある。しかし、ここが確かに「玉門関」であることを示す証拠は、実のところ発見されていない。同様のことは樓蘭王国、すなわち善王国の首都とされた遺跡にもあてはまる。最初の発見と不十分な資料操作が招いた誤りがあると、氏は述べる。

後の紙と木簡の使用法と機能の相違は、戦国時代までさかのぼってどう説明できるか、という質問を皮切りに質疑が始まった。

日本では水田遺跡として登呂遺跡が有名だが、後々、あのように現代風の広い区画をもつ水田は、実は例外的で、より細かな区画を扇状地などに作り出すことから、日本の水田は始まったことが次第に明らかになった、そんなことが思い起こされたという感想もあった。

三番目に発表されたのは、民族学博物館の塚田誠之氏である。演題は「壮族社会文化史の要点」であった。

壮族は中国南部に居住する少数民族である。長期にわたり漢族の影響を受けてきた。「漢化」の度合いの高い民族集団として知られ、その社会・文化は漢族の影響を受けつつ変容を遂げてきた。塚田氏は、壮族の民族形成史の輪郭を明らかにするため、社会・文化史、とりわけ社会変動と文化変容の過程を検討するとともに、それらの変動・変容をもたらした契機としての壮族と漢族との民族間関係の動態を検討されてきた。今回は、その概要を話題として提供された。

白鳥芳郎・河原正博氏らから始まる研究史を紹介された後、壮族の社会変動がまず解説された。中華人民共和国成立以来、壮族は

「土着民」であることが前提とされているが、歴史的に遡って検討してみると、その移住が問題になる。

壮族のかなりの部分は、明代に貴州や湖北・湖南、そして広西西北部辺境地帯などから小規模集団が波状的に来住している。明初に漢族が貴州に進出し、広西では漢族が壮族を招いたのが問題の移住の要因に挙げられる。

壮族・漢族間の対立と壮族の蜂起、統治権力の弾圧などのうち、清代には壮族の佃農化が一層進行し、独自の社会が崩壊していく。漢族の影響が少ない地域を主たる検討対象としてきた従来の研究では、このような変容については、見過ごされてきた。

壮族社会の特徴と、清代中期以後の変容については、広西北部山岳地帯の龍勝県龍脊地域の村落・村落群を舞台として検討がなされた。壮族の非階級的統率者の「寨老」は、1933年以前は、寨、同姓集団、十三寨、十三寨を越える範囲、のさまざまなレベルのめ事を処理し、行政機構の末端に位置づけられていたが、1933年以後、統治権力の浸透によって、その役割は大いに制限された。これにより社会体制は変貌をとげる。

壮族の文化変容については、直轄地以外に土官として漢文化を受容した層は明代中期ないし末期以後いち早く漢化をとげたが、領民の漢化をさまざまに漢文化を専有した。その漢化では壮族の伝統も多分に残されている。壮族の婚姻習俗についても婚礼までの過程に顕著のように、一見漢族の風習を受容したように見えながら、例えば、初生児出生後に行われる「満月酒」という祝宴が漢族の場合に比べて大規模であるなど、伝統が根強く息づいている例が紹介された。

来歴の違う集団が集まっていることや、漢族の主たる居住域からの遠近などの条件が重なり、年中行事には地域差がみられる。方言の差も著しい。来歴を異にし政治的に自立的であり文化的に必ずしも等質的でない多くの下位集団が、歴史的展開にともなって結集・融合して「壮族」という民族範疇を形成してきたようである。

族としてのまとめりは、「寨老」のところでどのように説明されるか、という質問を皮切りに討論が進んだ。チベット族にも非常に

多くの方言があり、たがいにまったく違う言語だと言っても過言ではない場合もある。しかし、服装など習慣の類似から自分たちはチベット族だとすぐに認識するようだという話題なども提供された。

最後に発表されたのは、民族学博物館の佐々木史郎氏である。演題は「アムール川下流域・沿海地方の民族構成に対する清朝統治の影響について」であった。

調査をしたり、過去の調査を利用したりするには、その結果をどう判断するかの難しさがつきまとう。調査がなされるとそれが政府の民族政策に反映される。それが少数民族に影響を与える。その影響を受けた状況についてまた調査がなされる。それがまた政府の民族政策に反映されるという循環を繰り返す。だから、調査して得られる結果がどういう位置づけをもつかが判断に悩むところである。歴史学ではかつて、19世紀以後にヨーロッパの民族学者が作り上げてきた民族分類と名称が一人歩きして、あたかもそれが時代を通じて不変であるかのごとく受け取られて、史料に登場する集団が無条件に否定されたことがあった。しかしそれはあらぬ誤解を招き、地域の歴史像をゆがめる結果にもなった。それを防ぐには、各史料における住民分類の変遷過程と分類基準に十分留意する必要がある。例えば、清初のウエジ Weji、ワルカ Warka、フルハ Hurha や使犬部 Yendahun takurara gurun といった清朝側の記録に出てくる住民名は、時代とともに適用範囲が変化し、またあらたな住民名が姿をあらわす。清代の東北アジアの場合、その統治機構が住民区分と住民の民族誌的な意識に大きな影響を与えた。

例えば、18、19世紀の『三姓副都統衙門檔案』には、戸/boo、郷/gashan、姓/hala といった言葉で辺民の組織が語られているが、戸とは世帯を意味するのか、家屋を意味するのか不明である。この戸が毛皮貢納と恩賞受け取りの最小単位となる。郷は集落のことだが、いわゆる自然村なのか、自然を行政側が机上でまとめたり分割したりしたものかわからない。姓の hala は直訳すれば「氏族」の意味になるが、時折民族に相当する言葉としても使用される。

清朝の住民の民族意識形成への影響をみて

いくと、清朝の住民分類の指標は、八旗の一員か忠実な毛皮貢納民か、他国の被支配民かという服従の形式、地理的な分布、自称・他称による集団名称、生業・文化、言語、そして hala がある。言語・文化の同化については、満州語・漢語の影響、生業活動への影響、衣服・髪型（弁髪など）への影響、紋様への影響、信仰への影響などが議論できる。社会構造・社会組織上の変化について述べると、旧フル八部のように、満州八旗への編入によって集団帰属意識が「満州」へと変化したり、新たな帰属意識が生まれたりということがある。

辺民制度の hala であるが、hala は満州をはじめ、満州ツングース系の諸民族に共通する父系出自集団で、社会構造の中心をなす組織であったが、清朝はそれを満州をはじめ東北地方住民すべてに適用して統治機構の中に組み入れたため、住民の固有の社会組織とは遊離した。しかし、時とともにその統治機構としての hala が住民を縛り始め、固有の社会組織へと脱皮していく。それには地域差が見られ、アムール川本流のナーナイの間では統治機構としての hala に由来する氏族が6割を越えるのに対して、ウリチでは3割程度になり、ニグヒ・オロチ・ウデヘなどでは1つか2つ程度、ウイルタ・アイヌには全く残されていない。それは清朝の統治力と統治方針の地方差を示すものと言えるが、それがまたこの地域の民族的自他区別の指標の1つとなっている可能性があるという。

hala の解釈をめぐる質問から質疑応答が始められ、地域を越えた問題として討論された。

筆者は、殷という限られた国から漢字が周に継承され、さらに伝播した過程を考えているが、戦国時代に整理された諸史料には、いくつかの領域国家ごとに他を表現する地域名称が異なっている。戦国時代の侮蔑の意をこめたレットルはりもあり、漢字が伝播する過程で地域的に出現した部族名もある。こうした古代の族名称を考える上でも、大いに参考になる。

途中からは、発表者の順番を問わず、質問をぶつける形式にした。時代を越え、地域を越え、共通する話題、参加者それぞれの研究にひきつけた質問が相次いだ。筆者に起因する準備不足の影響が懸念されたが、蓋を開け

てみれば、各自の興味関心を刺激し、かつ中国と周縁というテーマにも沿って討論が進んだ。事前の心配が杞憂に帰したことは、大変有り難いことであった。

わが研究所には、班研究会があり、それをまとめる定例研究会がある。今回の交流会は、後者の形式をふみつつ、所内研究者とお招きした研究者の交流という形をとった。広い視

野で研究をすすめるというわが研究所の理念に沿いつつ、他の研究所における研究の一端を承ることができ、得られた成果は多大なものがあった。お招きした方々からも、大変有益であった旨承ることができたことも、とても有り難いことであった。我が研究所の人的ネットワークに新たな1ページが記された。

(東洋文化研究所教授：文責)

センター便り

研究交流会

他の研究機関と交流を深めるために研究交流会を開くことが検討されてきたが、2002年1月15日に第1回目の交流会が開催された。東洋文化研究所の平勢隆郎教授と松井健教授を世話役として、京都大学人文科学研究所から富谷至教授、岩井茂樹教授、池田巧助教授、岡村秀典助教授、国立民俗学博物館から田村克己教授、塚田誠之教授、横山廣子助教授、佐々木史郎助教授をお招きして、「中国と周縁」というテーマで討論を行った。その模様については、本号で世話役の平勢教授が紹介しているので参照されたい。

第37回全国文献・情報センター長会議

2002年2月8日(金) 第37回全国文献・情報センター会議が、文部科学省から情報課学術基盤整備室の濱田幸夫専門官を来賓に迎えて、神戸大学経済経営研究所附属経営分析文献センターを当番機関として開催された。各センターの事業の概要の報告に続いて、データベース作成費のあり方、独立行政法人化にともなう資産評価の方法、5センターの枠組の再検討などについて、活発な検討が行われた。

センター助手

2001年11月1日付で、大田省一氏がセンター助手に採用された。大田氏は東南アジアと東アジア、とくにベトナムの建築史が専門である。

客員教授

2002年4月1日付でセンターの客員教授を、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の高島淳教授をお願いすることになった。高島教授はインド思想、とくにタントリズムやシヴァ教の研究がご専門である。

センター教官の交代

2002年4月1日付で東洋文化研究所の濱下武志教授と長澤榮治教授が、センター教授に配置替えになることが内定した。濱下教授は近代中国社会経済史、長澤教授はエジプトを中心とする近現代アラブの社会経済史が専門である。これに伴い、1999年4月以来3年間センターの立ち上げに携わってきた中里成章と宮蔦博史は、センター教授から研究所教授に配置替えになる予定である。

東京大学東洋文化研究所蔵・朝鮮半島族譜データベースの公開について

本センターのプロジェクトとして行ってきた朝鮮半島族譜の収集・調査が一段落を告げたので、この間収集した族譜のデータベースを近々公開する予定である。本号所収・宮嶋の紹介文にあるように、本研究所には550点あまりの朝鮮半島族譜が所蔵されているが、その全点について、書誌情報と画像情報から成るデータベースを公開しようという計画である。書誌情報としては、各族譜の書名、姓氏、本貫、発行年度(西暦および干支)、発行者、発行地、序文作成者、序文作成者の生年月日、巻数などを収録し、画像情報としては、序文全体、始祖から各族譜の起点となる人物までの世系図を収録することになっている。さらに族譜だけでなく、族譜と関連する書籍、例えば族譜編纂集の事蹟を記録したものなど、も同時に書誌情報として提供する予定である。本センターではすでに「近代朝鮮関係書籍データベース」を公開し、多くの方に利用いただいているが、族譜データベースも公開の暁には、さまざまに活用いただきたいと願っている。

東洋学研究情報センター運営委員会委員
(2001年度)

所外委員

落合 卓四郎 附属図書館長、大学院数理科学研究科・理学部教授
Ch ên, Paul Heng-Chao 大学院法政政治学研究所・法学部教授
川原 秀城 大学院人文社会系研究所・文学部教授
岩本 純明 大学院農学生命科学研究科・農学部教授
中兼 和津次 大学院経済学研究所・経済学部教授
村田 雄二郎 大学院総合文化研究所・教養学部助教授
田嶋 俊雄 社会科学研究所教授
小林 宏一 社会情報研究所教授
松井 洋子 史料編さん所助教授

所内委員

松井 健 教授 汎アジア部門
平勢 隆郎 教授 東アジア研究部門(第一)
大木 康 助教授 東アジア研究部門(第二)
小川 裕充 教授 東アジア研究部門(第二)
永ノ尾信悟 教授 南アジア研究部門
委員長
鎌田 繁 教授 西アジア研究部門
中里 成章 教授 センター造形分野
宮蔦 博史 教授 センター文献分野
板倉 聖哲 助教授 センター造形分野

センター長

原 洋之介 教授、研究所長

センターのスタッフ

原 洋之介(はら ようのすけ)センター長・東洋文化研究所長。東南アジア経済。

中里 成章(なかざと なりあき)センター主任・造形資料学分野教授。南アジア近現代史。

宮蔦 博史(みやじま ひろし)比較文献資料学分野教授。朝鮮近代史。

板倉 聖哲(いたくら まさあき)造形資料学分野助教授。東洋絵画史。

太田 省一(おた しょういち)センター助手。アジア建築史。

井手誠之輔(いで せいすけ)客員教授。東アジア絵画史。

佐々木郁子(ささき いくこ)業務掛長。

明日の東洋学

東京大学東洋文化研究所附属東洋学
研究情報センター報 第7号

発行日 2002年3月31日
編集・発行 東京大学東洋文化研究所
附属東洋学研究情報センター
〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番1号
電話 03-5841-5839(直通)
FAX 03-5841-5898
ホームページ

<http://www.info.ioc.u-tokyo.ac.jp/>

デザイン コスギ・ヤエ / 印刷 (株)ヒライ